慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	坂西由藏教授著 経済生活の歴史的考察
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.9 (1925. 9) ,p.1375(127)- 1377(129)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250901-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國家管理による敎育の發達、最低標準決定のための産業狀態統制等は第十九世紀のヨーロッパ諸國に於て見る所なれども、此産業社會の變化に處せんとしたる苦惱は英國に於　最も甚し。蓋し第十九世紀の歐洲諸國に斯る産業上の變化が生じたる時、旣に英國は弊害の最も著しきものにつきて對策を見出し、他の諸國は英國が機械生産の試練を受け幾多の失敗に堪えて得たる所の經驗に賴るを得たるものなり。此點より見るも、第十九世紀の歐洲諸國の經濟的發展にとりて、第十八世紀末の三十年、第十九世紀初頭三四十年の英國の經濟的發達、即ち通常所謂「産業革命」の時代の特に重要なる意義あるを認むるなり。

新刊紹介

坂西由藏敎授著「經濟生活の歷史的考察」

高橋誠一郎

此の書は神戸高等商業學校敎授坂西由藏氏が二十一年間在職の記念として、明治四十三年六月以來、今日に至るまで、我が經濟學界に發表せられたる貴重なる研究二十一篇を採り、之れに若干の修正を加へて、新たに刊行せられたるものである。其の內六篇は敎授が刼症の眼病に侵され、病勢次第に進みて、終には殆んど失明せらるゝに至りし悲慘なる過去四ケ年間の所產である。

「經濟生活の歷史的考察」一卷中に收錄せられたる論稿二十一篇は「經濟生活發達の過程と經濟自由の精神」八篇、「古代羅馬及び中世獨逸の土地大所有制度」五篇「近世工業國の問題」五篇、並びに「價格生活概論」三篇に分たれる。是れ等の諸論篇が過去に於て發表せられたる形態を觀るに講演速記若しくは草稿十二篇、「經濟大辭典」の項目七篇及び雜誌論文二篇である。即ち此の書中に在つて最も多きを占むるものは講演の筆錄であるが、他の講演集に於て屢々見るが如く、贅言長語は一も之れを看出すこと能はずして、全篇悉く簡潔無雜の名文字を以て組成せられてゐる。二十年の昔、敎授の「企業論」によつて敎へらるゝ所多かりし吾人は、今復た此の著によつて學ぶ所が大である。唯だ吾人が本書を通讀して多大なる遺憾を感ずる所のものは、此の著が敎授の深き研究と大なる蘊蓄の僅かに一端を示されたるものに過ぎざることである。何すれぞ、敎授は藏すること多くして、世に示すことの吝かなるや。

教授は飽くまでも社會的思想傾向の相對性を信ずるものであつて、其の永久普遍の絶對性を認むるものではない。教授の目的は事物至善の狀態を指摘するに存せずして、事態が現實に展開する不斷の發達過程を闡明するに存する。「何である可きか」及び「何である可きか」の二つの問題の中、教授は單に前者のみに答へんとするものである。教授は理想主義的基礎の上に立てる科學の可能性を拒否するものである。即ち教授は曰く、「私は人類の文化發達の過程に對して何等の理想をも持つことの出來ないものである。私に取つては、人類の文化が如何なる方向に向つて進み來つたか、其の發達の道程の上に如何なる傾向が現れたかといふことだけが問題であつて、吾々が努力によつて到達す可き境地は何であるかといふことは問題ではない。私は所謂『理想鄕』を前提することの出來ないものである。抑も人類文化發達の極度は何であるかといふことは學問的認識の外に在るものと信ずるのである」と。（四頁）。

即ち教授は社會進化の窮極理想を以て吾人の知識に依つて豫見すること能はざるものと做すも、而も社會進化の事實が歴然として存することを認める。（三一頁）。而して教授の見を以てすれば、經濟的文化の發達とは畢竟ずるに「勞働集約の程度增進の過程を指さすものであつて、勞働集約の程度の增進は個性の發達に俟ち、而して此の個性の爲めに分化と平準化との二傾向が絶えず働くものである」ことを縷說する。（二二頁、三二頁以下）。分化の傾向と集化の傾向とは同時現象である。「分化の作用及び之れに應じたる集化の作用と平準化の作用との交代連續の間に社會の進化は編み出される」。（三五頁）。斯くて吾人の社會生活は絶えず窮極の理想に向つて進展しつゝあるのである。而して社會生活の發達に連れて社會思想は分化し、分化したる思想は相觸れ、相當り、相錬磨せられ、全體の力を以て進化の階段を昇り行くのである。（四〇頁）。

教授の所論は極めて明快であつて聊かの澁滯をも見ない。而も吾人をして遺憾を感せしむるものは、教授が經濟的發達の法則を求めんとせらるゝに當つて、其の準備たる可き經濟史的研究の資料を吾人に示さるゝこと尠少なるの一事である。シモラーは曾つて其の著「國民經濟學原論」の第二卷に於て悲しげに人類の經濟生活が一定の畫一性を有し、若しくは畫一なる發達の痕跡を示するや否や、又た何等かの發達を行ひつゝあるや否やを言明すること能はずと說いてゐる。然も吾人は經濟的發達法則確立の可能性を信ずるものではあるが、唯だ其の以前に於て苦心慘憺たる經濟史的研究を要求しなければならぬ。

教授は固より多年經濟史の研究に精進せらるゝものである。而も本篇中に於ける原始家族制度の研究の如き、救貧制度變遷の其れの如き、又たは古代羅馬及び中世獨逸土地大所有制度の其れの如き、或ひは概括的に過ぎ、或ひは斷片的なるの憾みあるを免れない。吾人は更らに精細にして更らに系統的なる教授の研究の披攄せらるゝの機を鶴首して待つ。而も教授は今や發表す可き多くのものを藏しながら、殆んど失明の狀態に在つて百事其の意の如くならざるは我が學界の一大恨事である。吾人は教授が絶大の努力と忠實なる助手の援助とに依つて其の薄倖なる境涯に打ち克ち、其の無限の蘊蓄を傾注して、經濟史的研究に依る國民經濟生活理論の系統的叙述を完成せらるゝの日あらんことを希望して止まざるものである。

（大正十四年六月二十五日發行、合資會社大鐙閣出版、定價金貳圓八十錢）。

竹内謙二氏譯「國富論」增訂版

高橋誠一郎

竹内謙二氏は其の邦譯「國富論」第三卷に於て、更らに Edwin Cannan 版「國富論」を取つて之れが